

修士論文要旨

学籍番号 21GH206

氏名 山本 紳司

人文社会科学専攻 (コース: 現代共生コース)

論文題目: 第二言語学習における明示的知識と暗示的知識の測定に関する研究-3つのdesign featuresが文法性判断テストに与える影響について-

第二言語習得研究において、明示的知識は意識的な言語知識、暗示的知識は無意識的な言語知識であるということが幅広く支持されている。これら2種類の知識についてより明確な構成概念の理論的、操作的な定義の解明が求められている。現在特に問題となっているのが、これら2つの知識がどのように関わり合っているのかということであり、研究者の間で主張が異なっている。この問題を解決するためには、明示/暗示的知識をそれぞれ分けて測定できる器具の開発が必要とされている。本研究では、文法性判断テストにおける3つの設計条件(design features)に焦点を当てている。一部の研究者はこれら3つの設計条件(時間制限の有無、音声での刺激文提示か文字での刺激文提示か、刺激文が文法文か非文法文か)を組み込むことで、文法性判断テストが明示/暗示的知識を分けて測定することができるかと主張している。しかしながら、明示/暗示的知識測定器具としての妥当性については議論が分かれるところであり、さらなる研究が求められる。そこで、本研究では以下の2つの研究質問(RQ)を挙げている。

RQ1. 3つの設計条件が文法性判断テストにおける学習者のパフォーマンスにどのような影響を与えるのか。

RQ2. 3つの設計条件を組み込んだ文法性判断テストは明示/暗示的知識測定器具として妥当なものなのだろうか。

Vafaehe他(2017)では、文法性判断テストは学習者に形式に焦点を当てさせるテストであるので、測定できるのは明示的知識のみであると結論付けている。R. Ellis(2005)で提案されている明示/暗示的知識の操作的定義によると、学習者は意味に焦点を向けている場合には暗示的知識を用いており、形式に焦点を当てている場合は明示的知識を用いているとしている。そのため本研究では、学習者により意味に焦点を向けさせるために意味理解の質問を文法性判断テストに取り入れることにした。本研究では、RQ1を明らかにするために多元配置分散分析を行い、RQ2に対しては主成分分析を行った。40名の日本人英語学習者を対象に、実験が行われた。用いられたテストは、「音声での時間制限あり文法性判断テスト」「文字での時間制限ありテスト」「音声での時間制限なし文法性判断テスト」「文字での時間制限なし文法性判断テスト」「メタ言語テスト」である。

多元配置分散分析の結果、3つのdesign featuresはすべて有意に文法性判断テストの得点に影響していた。また結果から、文法文に対する得点が被験者の純粋な言語知識を反映していない可能性が示唆された。主成分分析の結果から、「時間制限の有無」と「音声での刺激文提示か文字での刺激文提示か」の要因が明示/暗示測定に貢献していることが示唆され、後者の方がその影響が大きかったということが示された。音声での提示は、学習者に即時的な処理を求めらるので、被験者が、明示的知識を用いたプロセスである「内省」を行うことを難しくしたことが考えられる。また、音声での提示は、聞こえたそばから消えていくという性質を持っていることも被験者の「内省」を難しくしたということが考えられる。また、形式の顕著さが低いと考えられる文法項目に対して被験者の得点が低かったということが示唆された。おそらく、意味理解の質問により、被験者は意味に焦点が向いていたということによりこれらの文法項目に対して、文法の誤りに気づきづらかったということが考えられる。

本研究では、被験者の英語力と問題の難易度の整合性について、十分に考慮しているとはいえないため、今後の課題としては、事前の被験者の英語力の厳密な測定とそれに応じた課題の設定が求められる。